

令和二年十二月

交通安全全子供作文集

小・中学校児童生徒の作文第四十三集



みんなが
あんなに
安全に
すごせるように

一般社団法人

愛媛県交通安全協会

後

援

愛媛県教育委員会



伊予銀行

この作文集は、伊予銀行様からご寄付いただいた「交通安全定期預金の積立金」の一部を活用して作成しました。

は し が き

愛媛県交通安全協会・県内十八の地区交通安全協会では、愛媛県教育委員会の後援により、小・中学生を対象に、毎年交通安全に関する作文を募集をしています。この趣旨は、小・中学生の情操教育に資するとともに、交通安全についての関心を高め、子供の交通事故防止を図ることを目的に、昭和五十三年から実施しているもので、本年は小・中学校併せて百二十二校から三千六百三十七編という多数の応募がありました。

応募作品について、地元の地区交通安全協会の第一次審査を経た八十二編を、愛媛県交通安全協会の第二次審査で四十五編選定し、更に愛媛県教育委員会に第三次審査をお願いして厳正な審査の上、愛媛県交通安全協会入選作文として二十五編を選んいただきました。

作文は、子供たちが身近に体験したこと、家族や友達が交通事故の当事者になったことなど、広く交通安全の大切さについて、率直にかつ切実に訴える内容となっております。

今回、入選作品二十五編を「交通安全子供作文集」第四十三集として発刊するに当たり、「愛」をシンボルマークとし、題名は、入選作品を代表して、今治市立伯方小学校二年生の野間華帆のまかほさんの「みんながあんぜんにすごせるように」とさせていただきました。

この作文集が家庭、学校及び職場において、一人でも多くの方に読まれ、交通安全への関心と認識をより一層高めていただければ望外の喜びです。

応募していただいた多くの小・中学生の皆様には、感謝いたしますとともに、作文集発刊のためにご協力いただいた関係者の皆様に厚くお礼を申し上げます。県民の皆様には、今後とも交通安全協会の活動にご理解をいただき、一層の御支援と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

令和二年十二月

一般社団法人 愛媛県交通安全協会会長 矢野 精 一

愛媛県交通安全協会入選作文目次

「小学生の部」

「わたしのつうがくろ」	伊予市立中山小学校	一年	かめざき 亀崎	ゆあ 結愛	1
みんながあんぜんにすごせるように	今治市立伯方小学校	二年	のま 野間	かほ 華帆	2
いのちのブレーキ	西条市立中川小学校	三年	まなべ 眞鍋	あず 杏珠	3
お守りの言葉	今治市立近見小学校	三年	よしだ 吉田	ゆな 有那	4
交通事故から身を守るため	大洲市立喜多小学校	四年	まつおか 松岡	やえ 弥依	5
自分の身は自分で守る	愛南町立平城小学校	四年	しゅうの 秀野	みあん 未杏	6
交通事故の体験を通して	西条市立小松小学校	五年	とだ 戸田	ななこ 菜々子	7
交通安全は私から	松山市立久枝小学校	五年	やまさき 山崎	ゆみな 友美菜	8
命を守る	四国中央市立川之江小学校	六年	おおにし 大西	こはる 心晴	9
守ってほしい交通規則	内子町立大瀬小学校	六年	たかおか 高岡	ことば 幸音羽	10

「中学生の部」

忘れられない出来事	西条市立西条東中学校	一年	くめ 久米	のあ 乃愛	12
免許返納の大切さ	松山市立拓南中学校	一年	なか 中	みつ 美月	13
安全な乗り方	愛媛大学教育学部附属中学校	一年	ひら 平岡	こころ ころ	15
免許のあり方	松山市立鴨川中学校	一年	よしか 好川	りこ 梨子	16
気を付けよう自転車！	鬼北町立広見中学校	一年	かわぞえ 河添	ゆい 結	18
高齢者による交通事故を防ぐには	西条市立西条北中学校	二年	とっとり 鳥取	みゆう 美結	19
「自分は大丈夫」と思わずに	西条市立河北中学校	二年	もりかわ 森川	かえ 花恵	21
ながら運転の危険性	今治市立伯方中学校	二年	かたやま 片山	るな 瑠菜	22
「そう祖父の決断と共に」	松山市立旭中学校	二年	ちちぶ 秩父	みゆう 心悠	24
もう一歩先の慎重さを	松山市立久米中学校	二年	なかつか 中塚	はるひ 晴日	25
ポカリ・ホットの増える未来へ	四国中央市立土居中学校	三年	たかはし 高橋	みさき 美咲	27
経験を胸に	今治市立立花中学校	三年	にしうら 西浦	りづ りづ	28
曾祖母との約束	今治市立西中学校	三年	かねこ 金子	あまね 天音	30
「当たり前前の日常を守るために」	愛媛大学教育学部附属中学校	三年	おおの 大野	あかり あかり	31
交通事故から尊い命を守るために	松山市立三津浜中学校	三年	とくまる 徳丸	なみね 波音	33

愛媛県交通安全協会入選作文（二十五編）

【小学生の部】

「わたしのつうがくろ」

伊予市立中山小学校

一年 亀崎 結愛

わたしは、まいあさ、しゅうだんとうこうで、あるいてがつこうに
いつています。

きをつけていることは、ふたつあります。

ひとつめは、いちれつにならんで、はくせんのうちがわをあるく
ことです。

ふたつめは、はくせんのないところはとくにきをつけて、くるま
がきていないか、みぎひだりをみてかくにんすることです。

いままでは、かぞくとくるまでとおっていたみちも、あるいてと
おつてみると「あぶないな」「きをつけよう」と、きづくことがたくさ
んありました。

わたしは、こういうことにきをつけたらよいか、かぞくではなし
あいました。

つうがくろは、やまみちでカーブもおおいです。くるまは、あま
りとおらないところなので、あぶなくないだろうとおもっていまし
た。

でも、おとうさんは、「くだりみちは、スピードがでて、きゅうに

くるまががつてくることもあるからあぶないんだよ。」と、おしえ
てくれました。

おかあさんは、「あるいているひとがいるときは、くるまのスピー
ドをゆるめたり、くらくなるまえにライトをつけたり、しているん
だよ。」と、いつていました。

わたしは、はなしあいをしてみて、じぶんだけではなく、くるま
をうんてんしているひとも、きをつけていることがたくさんあるの
だとおもいました。

これから、6ねんせいまでしゅうだんとうこうでがつこうにい
きます。こうつうあんぜんきょうしつでおしえてもらったことや
はなしあったことをまもつて、あんぜんにつうがくしたいです。

「じぶんのいのちは、じぶんでまもる」「いのちはひとつ」を、わす
れないようにします。



みんながあんぜんにすごせるように

今治市立伯方小学校

二年 野間 華帆

テレビを見ると、小さい子がおうだんほ道を、きゅうにとび出して、車がとまれず、じこにあつたというニュースをしていました。それを見て、わたしはとてもかなしくなりました。じこにあつた子はもう大すきなかぞくにも会えません。そんなかなしい思いをする子が、へらせるように考えてみました。

まずいつも気をつけていることは、道をわたる時は、かならずおうだんほ道をつかいます。そして、一どとまってから車がきていないかをかくにんしてから手を上げてわたります。また、ほ道のない道では、白い線からはみでないようにします。自てん車にのる時は、かならずヘルメットをかぶり、とおくまで一人で行かないようにしています。

つぎに、きせつごとに気をつけることを考えてみました。

春は、一年生のお手本になるように気をつけます。また、来年からは、あるいてとう校になるので、いつも気をつけていることをかならずまもります。つゆになると、かさをよくつかうので、前が見えにくくなり、かおをかくさないよう心がけたいと思います。

夏になるとかんこうにくる人がいるので自てん車や車が多くなり、サンダルであるくこともあるのでこけたりするため、足にあったサンダルでこけないようにします。また、かんこうにきている人は自分の気をつけているところを知らないかもしれないのでいつもよ

りちゅういします。

秋は、だんだん日がしずむのが早くなるので、夕方のおそくまであそばないようにし、早めにかえります。

冬は、ネックウオーマーや耳あてで耳をかくすと、音が聞こえづらくなるので、いつもより、まわりをよく見ます。

みんながあん全にすごせるように、気をつけることがたくさんありました。のこりの夏休みもこう通ルールをしつかりまもって、たのしい休みにしたいです。



いのちのブレーキ

西条市立中川小学校

三年 眞鍋 杏珠

「キキーー！」

「ドン！」

あの時の音や様子は、今でもわすれられません。

日曜日の昼、自てん車にのつていたわたしは、曲がり角で、車とぶつかってしまいました。そのしゅん間わたしは、心ぞうが止まってしまいそうなほどおどろきました。

その時は、わたしも車を運てんしていた人も、ブレーキをかけていたので、大きな事こにはなりませんでした。しかし、わたしの体のふるえは止まりませんでした。「もしかしたら、大きな事こになっていたのかもしれない。」そう思うと、体中がさむくなつていくように感じました。近くにいた友だちも、とてもおどろいた様子でした。友だちにもめいわくをかけてしまったと思うと、さらに気持ち落ちこんでいきます。けいさつかんの取り調べは二十分ほどでしたが、話を聞かれても頭に入ってきませんでした。

「なんてことをしてしまったんだ。」

そんなことを考えながら、家に帰りました。

家に着くとお母さんがなきながら、

「ブレーキをかけてくれてえらかったね。こわかったね。」

と言ってくれました。その言葉のおかげで心があたたかくなりました。命を守ることは、とても大切なことだと感じました。

また、家族は、私が元気であることを願っているのだと思いました。だから、家族のためにも命を守っていききたいと感じました。

このことからわたしは、自てん車教室にさんかすることにしました。そこで学んだことは三つあります。

一つ目は、スピードを出しすぎないことです。スピードを出しすぎると、車としようとしてしまうかもしれません。わたしは、けいんしたので、この大切さがわかります。

二つ目は、交差点や角を曲がる時は、左右と右後ろをかくにんすることです。車や人がいないかを見ます。わたしは、わすれやすいので気をつけます。

三つ目は、ブレーキをりよう手でにぎることです。かた手だけだと、すぐに止まれず、前に進んでしまいます。どんな時でも、すぐ止まれるように、いしきしていきたいと思います。

これからは、三つのことを守って、自分のいのちも、相手のいのちも大切にしたいと思います。そして、みんながえ顔で元気に過ごせる町にしたいです。



お守りの言葉

今治市立近見小学校

三年 吉田 有那

「気をつけてね。行つてらっしゃい。」

わたしは、この言葉を毎朝三度聞いている。お母さんが、お父さんとお兄ちゃんとわたしに言う言葉です。なぜ、毎日みんなに言うのか分からなかったからお母さんに聞くと、

「元気に安全に帰ってくるためにおねがいする、まほうの言葉よ。」と、話してくれました。

前に、わたしがあわてて家を出ようとすると、

「ちよつと待つて。」

と聞こえ、

「気をつけてね。行つてらっしゃい。」

この言葉が出発の合図です。

ほかに、お母さんとの約束の言葉があります。自動車に乗った時は、「シートベルトをした。」自転車に乗る時は、「ヘルメットかぶった。」道に出る時に、一回止まって左右かくにん。「あせらずゆっくりと。」いろいろな言葉です。どの言葉も、あたり前のことばかりだけど、わたしがきちんとルールを守るために、心ばいしてかけてくれている、お守りの言葉だと思いました。

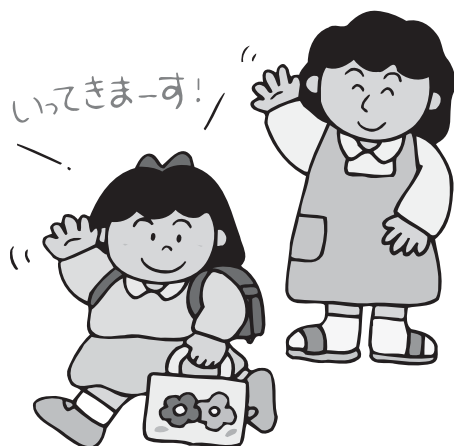
お母さんだけではなく、学校の交通安全教室で、けいさつの方にも、かくにんの言葉を教えていただいた。それは、自転車に乗る時の点けんの合言葉『ブタハシヤベル』です。『ブ』はブレーキ、『タ』は

タイヤ、『ハ』ははんしゃぎ、『シヤ』は車体、『ベル』はベルです。この合言葉は、安心安全をねがう言葉だそうです。みんな交通事故をふせこうと思っています。

でも、交通事故は、いつ、どこでおこるか、そして、いつわたしもあつてしまふか分かりません。それに、自分が気をつけていても、おこることだってあります。学校の交通安全教室で、交通ルールは、車を運転している人だけではなく、自転車に乗っている人も、歩いているわたしたちも、みんなが守らなければ事故はなくならないと教えていただいた。

お母さんはいつもお守りの言葉で、わたしや家ぞくを見守ってくれています。でも、その言葉で安心しないで、自分で交通ルールをしつかり守り、ゆだんせず、気をつけたいと思います。

お守りの言葉を大切に、命は一つしかないので、自分で自分を守りたいです。



交通事故から身を守るため

大洲市立喜多小学校

四年 松岡 弥依

私は、一度車にひかれそうになりました。それは、飛び出してしまったからです。飛び出してしまおうとこういう事になるのだと身に持って実感しました。

みなさんには、このような危険な目にあつてほしくない。その思い交通安全について書こうと決めました。“事故”という事がどんなに危険かを知ってもらおうと思いました。

私はある日、学校から急いで家に帰っていました。早く帰って宿題を終わらせようと思っていました。だから、走って帰っていました。そして、へいであくくれて見えない道路が右がわにありました。本当はそこで止まって確認しなければいけない場所なのに、私は、走って通りすぎようと思いました。すると道路から車が出てきました。私はびつくりして、もどり、車を運転していた方も止まって下さったのでなんとか事故にならずにすみしました。

その時は、とてもびつくりしました。そして、それから毎日左右の確認や車が来てないかを丁寧に確認をしています。少し気をぬいただけで命を落とすということを分かったからです。私は、その場所以外にも危ない場所はないかと思い、毎日登下校中にさがしました。

すると、いくつか危険な場所がありました。ざつ草が高くて車が通るのが分からない場所。カーブがあつて曲がつて来る車が見えに

くい場所。車のり合がたくさんあったり車がたくさん通る場所。このように危ない場所がたくさんありました。普通に毎日歩いていた所でもたくさんさんの危険があると分かりました。そして、考え方も変わりました。今までは、「交通事故なんてそう起きるもんじゃないし、別に気にしなくていいんじゃないの？」と思つていたけどそうじゃない、交通事故について考えることは大切なんだと考えが変わりました。そして行動も変わりました。毎日、安全に登下校し、車をよく見て、白い線からは出ないようにと、常に心がけています。

私は、この出来事により命の大切さというものを分かったような気がします。私は、交通事故から身を守るということに一歩近付けた気がします。そして命の大切さももっと分かった気がします。これからずっと交通事故に気をつけ、命を大切に、安全な日々を送つていきたいと思っています。



自分の身は自分で守る

愛南町立平城小学校

四年 秀野 未杏

七時二十分。いつもおじさんは、横だん歩道で私たちを待つてくれています。

「おはよう。」

という声とともに、黄色の旗を上げて、私たちをゆう導してくれます。私たちの安全を守るために、毎日、朝早くから横だん歩道に立つてくれているのです。

以前の集合場所は、車の通りが多く、道もせまかったので、困っていました。それを気づかせてくれたおじさんが、別の安全な集合場所を見付けてくれました。そこには屋根もあるので、雨がふる時もかさをささずに待つことができるので、安心です。

おじさんは、いつも学校までいっしょに歩いてくれます。と中の横だん歩道では横だん旗を高く上げてゆう導してくれます。わたり終わったら、私たちといっしょに、車の運転手さんにお礼も言ってくれます。おじさんがいると、登校中に、つい二列になってしまっても、すぐに注意してくれます。わたしたちもすなおに聞いて、すぐに直します。

一度、そのおじさんが足を悪くして、一週間ほど見守りをお休みしたことがあります。その間は、自分たちで気を付けながら歩きました。注意してくれる大人がいなくても、自分たちできちんと歩くことが大切だと思いました。一週間、自分たちで注意し合って、安全に歩きました。おじさんがいない時に、もし、事ここにあつてしまったら、おじさんがとても

悲しむと思ったからです。

久しぶりにおじさんと会った時は、つえをつきながら学校までついて来てくれました。

うれしかったけど、とても心配になりました。そして、今までのように、めいわくをかけないようにしたいと思いました。

テレビで、自分たちと同じくらいの小学生が事ここにあつて、なくなつてしまうというニュースを見たことがあります。その子も、きつとわたしたちのように毎年、「交通安全教室」に参加していると思います。信号機のある交差点や信号機のない交差点のわたり方を何度も練習します。自転車の安全な乗り方も練習します。気を付けていないわけでもありません。それなのに、事ここは起きてしまうのです。ちょっとした気のゆるみが原いんなのかもしれない。

わたしは、自分の身を守るため、つねに危険があることを意識しています。横だん歩道を歩く時には、自分のそんざいに早く気付いてもらえらるうに、大きく手をあげています。自転車に乗る時には、ブレーキやタイヤの点検をした後、ヘルメットをかぶっています。すべて、自分の命を守るためです。

わたしには、大切な家族や友達がいます。その人たちが悲しい事ここにあわないうに、みんなに気を付けてもらいたいのです。見守られることを当たり前だと思わずに、「自分の身は自分で守る」を伝えていきたいです。

交通事故の体験を通して

西条市立小松小学校

五年 戸田 菜々子

みなさんは、学校へ行くときや学校から帰るとき、危険な思いをしたことはありませんか。また、そのような場面を見たことはありませんか。私は一度、そのような場面にさうぐうしたことがあります。

私の学校は、門を出るとすぐに信号機のない横断歩道があります。私はいつもそこをわたって下校しています。私たちが下校する時間帯は車の通りも少なく、見通しも比較的よい場所です。その日も、いつもと変わらず、友達二人といっしょに、門の方へ向かっていた。ただ一つちがつていたことは、その日はよく風がふいていたということです。風にふかれた葉がたくさん舞っていて、友達はその葉をキャッチしようと夢中になっていました。私は先に横断歩道をわたりました。後ろを振り返ると、友達はやそ見をした状態で横断歩道をわたろうとしていました。

「あぶないやろ。」

と、じょうだん半分で声をかけ、パッと目を離したとき、電動カートに乗ったおじいさんと、友達がぶつかりました。私は初めて目の前で交通事故を見て、とても驚きました。学校に先生を呼びに行こうとしたとき、偶然、陸上練習で運動場に出ていた先生が来てくれました。しばらくして、警察も来ました。先生や警察の人から、「どうして事故になったのか」「どこで事故が起こったのか」「何をしていたのか」などを聞かれました。もっときちんと注意してい

れば、こんなことにはならなかったかもしれないと、とてもこうかいています。

私はこの事故があつてから、登下校の仕方を見直すようになりました。「横断歩道をわたる時は、きちんと止まり、左右の確認をすること」「手を挙げてわたること」「道の途中で遊ばないこと」などです。当たり前のことですが、これらのことを細かくチェックすることが大切だと強く感じています。また、雨の日は、晴れの日と比べると視界が悪くなるため、特に注意しなければいけないと思いました。

私は、みなさんに、このような事故を経験してほしくありません。ぜひ、みなさんも自分の登下校の仕方を確認してみてください。



交通安全は私から

松山市立久枝小学校

五年 山崎 友美菜

「横断歩道は青になつても、必ず、きちんと左右を見て、安全を確認してから、横断してね。」

私の母がいつも、自転車で横断歩道を渡るときに私に言う言葉です。毎回言われので、そんなに言わなくてもわかつているのにと
思っていました。でも、母が言うのには理由がありました。

昔、私の祖母が大きな道路の横断歩道を信号が青になつたので、
自転車で渡ろうとした時、信号無視をした車が走ってきて、ぶつかりました。祖母はけがをして、救急車で運ばれました。仕事中心だった母は仕事と中で休んで、急いで病院に行ったそうです。大きな事故でなくて、祖母はその日のうちに家に帰る事ができたので、大丈夫でしたが、とてもこわかったと話していました。

私は横断歩道で信号もあつたのに、車が走ってくるなんて信じられないと思いました。

信号が赤だと車は止まらないといけないし横断歩道で渡っている人がいたら、止まるのが当然だと思っていました。でも、実際には信号が赤でも、横断歩道を渡っている人がいても、車は止まらず、交通事故が起つたのです。私は母の言っていることがわかつたような気がしました。

「車はスピードが出ていると、すぐには止まれない。気づいてから、急ブレーキをふんでも、車は止まれずに前に進んでしまう」と

母から聞きました。また、車の走るスピードが速いと、ブレーキをふんでから、前に進んでしまう距りはもつと長くなるそうです。

そこで、交通事故にあわないようにするには、自分も交通安全に気を付けて、行動するようにしないといけないと思いました。自分が気を付けるようにしたら、車の運転手の人が、もしも、うっかりして周りを確認していなくても、私が止まっていたらいいからです。

愛媛県では、「横断歩道止まろうキャンペーン」をしていることを知りました。「横断歩道、減速(原則)よく見て、止まりましょう」これは車の運転手の人たちの事故の防止するためのメッセージだけれど、私も同じように、いっしょに守っていけたらいいなと思いました。

これから私は、横断歩道だけでなく、道路を渡るときには、しっかり止まって、周りをよく見て、安全を確認してから、進もうと思います。



命を守る

四国中央市立川之江小学校

六年 大西 心晴

「命は一つ」……夏休みに入る前に、学校で先生から必ず言われる言葉です。知らず知らずのうちに、私の心の中に残っています。

自分の命は自分で守る……小学生の私になにができるかな、と考えてみました。

いろいろなことができるけど、二つのことを考えました。一つ目は、自転車に乗る時、二つ目は、車に乗せてもらう時です。

一つ目の自転車に乗る時のことです。私は、小学校三年生から一人で自転車に乗るようになりました。友達と一緒に遊びに行く時や図書館に行く時に乗っています。

自転車に乗る時に、必ず守っていること、それは、「ヘルメットをかぶる」ことです。自転車に乗っていて、転んだ時や事故にあった時に、頭を守ってくれます。もちろん、あごひもをしっかりしめています。あごひもをしめていなかったら、ヘルメットをかぶっていても、意味がありません。学校で見たビデオで、車と自転車が衝突して、ヘルメットが飛んでいく映像を見たことがあります。怖くてとてもいやな気持ちになりました。ぜったいこのようにならないように、あごひもをしっかりしめたいです。

また、自転車に乗る時には、「自転車乗車認定証」をもっています。お父さんやお母さんが、私が安全に自転車に乗ることができるかと判断して、学校に自転車を乗ってもよいという認定証を申し込

んでもらったものです。お母さんが

「大人が車に乗る時に免許証をもつように、心晴も、交通ルールを守って、責任をもって自転車に乗らなきゃね」と言つて、渡してもらいました。

実は私は、この認定証はすぐもらえませんでした。同級生の中にはすぐに認定証をもらっている子もいていいなと思っていました。だけど、それは、安全に乗ることができていなかったからだとは思いますが。自転車は車と同じあつかいで、車両になることも勉強しました。事故を起こす側になる可能性もあるとも聞きました。自転車を運転するときには、しっかりと交通ルールを守り続ける、自分の命も相手の命も守りたいです。

二つ目は、車に乗る時のことです。私にできることは、「シートベルト」です。今は、車に乗る時には、すぐにシートベルトをしめるようになりました。だけど、少し前までは、そうではありませんでした。「すぐにしなさい、シートベルト。」

とお母さんに必ず言われていました、家族の車に乗っていても、友達の家族の車に乗せてもらう時も、事故にあったことはありません。ちよとくらい大丈夫という気持ちがあそこにあつてすぐにしなかったのかもしれない。

だけど、すぐにするようになったのは、「車に乗る時にシートベルトをすることは、ルールである」ということをはつきり知ってからです。そして、その時にお母さんに、「車に人を乗せる時には、私はその人の命を守る責任がある。」と言われたことも覚えています。事故に直接あつたことはないけれど、もしあつてしまった時には、シートベルトをしているかしていないかで、あとあと命が助かるか助から

ないかにつながります。お母さんは、私だけでなく、親せきや私の友達を車に乗せるときも、シートベルトの確認をします。たった一つの動作でできるシートベルトだけど、私たちのことを守ってくれているんだと思います。

私は、まだ事故にあったことはありません。それは、交通ルールを守っているからだと思います。自転車のヘルメットや認定証、車のシートベルト、どれも守っているから、安全に過ごしています。守らなくても、もしかしたら、事故にあうことはないかもしれません。だけど、そのちよつとくらい大丈夫という気持ちがだんだん大きくなって、事故にあった時には、大変なことになると考えます。「命は一つ」ということを心に置いて、自分にできる命を守ることをこれからもしていきます。



守ってほしい交通規則

内子町立大瀬小学校

六年

高岡

幸音羽

「ウーン、ウーン。」その日も、こんな音が聞こえてきた。何だろう。最近よく聞こえてくるこの音について、お父さんに聞いてみた。すると、「近くの交差点で、警察官が一時停止違反の取り締まりをしていて、止まらなかった車をパトカーがサイレンを鳴らして捕まえている。」とのことだった。そんなにも違反をする人が多いのか。最近私を感じたことについて、三つ伝えたいと思う。

まず一つ目。私の家の近くには、信号のない横断歩道がある。その横断歩道は、地域の方々やお遍路さん、高校生などが利用している。もちろん、私も利用している。しかし、横断歩道の前に立つても、止まって渡らせてくれる車は少ない。ほとんどの車がスピードを落とさずに通過していく。荷物を持って横断する人は時間がかるので、事故にならないか不安になる。

次に二つ目。運転しながら下を向いている人を見かけることがある。どこか具合が悪いのかと、心配になったこともあった。しかし、テレビで事故のニュースを見たとき、そんな人たちの行動を知った。中には、スマホなどを見たり操作したりしながら運転している人がいたのだ。なぜ運転中にそんなことをするのだろう。危なくないのだろうか。気になったのであることを調べてみた。私の家の近くの道路は、制限速度が六十キロメートルになっているそう。制限速度を守って走ると、百メートルを約六秒で移動できること

になる。近くの道路には、百メートルが見通せる場所はない。さらに、対向車も同じスピードで走っているとすれば、約三秒で車同士の百メートルの間がゼロメートルになる。自分だけがスマホなどを操作することを許されていると思っているのかと、不思議に思う。

そして三つ目。去年くらいから、テレビやインターネットなどのニュースで、あおり運転の映像などが多く出ている。実際に、あおり運転が原因で高速道路で事故が起こり、亡くなった人がいるということを知った。私の住む大瀬でも、車間距離を取らずに走っている車や、追越ができない場所で追越をする車があるということを聞く。距離をつめられた車は、恐怖を感じると思う。する側の人は、される側の人の気持ちを考えないのだろうか。事故が起こる確率が上がることを考えないのだろうか。とても気になってしまう。

私は、自転車競技会などで、交通規制やルール、マナーなどを教わった。例えば、「信号機のない横断歩道では歩行者優先の原則があり、歩行者の有無を確認できなければ、横断歩道の停止位置で止まれるような速度で進行する。歩行者がいるときは、必ず一時停止する。」というものがある。なぜこのような規則があるのに、横断歩道の手前で止まってくれる車が少ないのだろうか。その他にも、多くの疑問が生まれた。なぜあおり運転をするのだろうか。なぜ決まった速度を超えて走るのだろうか。なぜ火のついたタバコを窓から捨てるのだろうか。子どもの私にとっては、難しいことが多い。運転免許を取るためにたくさん勉強や練習をして、取った後は平気で守らない。自分がよければ、他の人は関係ないのだろうか。私は、運転をしている自分の家族に、なぜ守らない人が多いのか聞いてみた。すると、車の中はへいさされた空間で、「だれも見えていないからいいだろう。」という

気持ちになるのではないかということだった。私は、その気持ちは理解できなかった。

車や自転車などを運転する人、歩く人をお願いがある。ほんのわずかな時間の出来事でも、事故につながることもある。一つの事故で、警察官や救急隊、医師や看護師など、多くの人が関わってくる。一つの事故で、大切な命が危険にさらされたり、失われたりする。そして、事故を起こした人も起こされた人も、大切な家族や友人に心配をかけてしまうことになる。みんなに、交通規則やルール、マナーを守ってほしい。そして、悲しい思いをする人が一人もいないようになつてほしい。



【中学生の部】

忘れられない出来事

西条市立西条東中学校

一年 久米 乃愛

中学生になって自転車に乗ることが多くなりました。その分、危険な目にあうことも多くなりました。自転車に乗って学校に行くときには、たくさんの交差点があります。交差点ではどこから車が来ているかわからないこともあります。だから、「もう少し早く走っていたら車と接触していた」と思うことも何度かありました。自転車はとても便利だけれど、その分危険も伴います。そこで、今の自転車の乗り方について振り返ってみようと思います。

まずは、違反になる乗り方についてです。もちろん、自転車にも車と同じように法律があります。例えば、二列で走る。これは違反ですが、よく見かけます。中には、三列になって走っている人も見たことがあります。並進すると、ハンドルとハンドルがからまって転倒してしまう恐れがあり、非常に危険です。二列になっただけでも、友達と話そうとして前の自転車に近づきすぎると、タイヤとタイヤとがぶつかり、バランスを崩して怪我をすることもあります。もし、転倒して車道に入ってしまうと、車にひかれるかもしれません。だから、自転車のルールを守ることは、

命に関係することなのです。自分が二列になっていることに気づいたら、すぐにやめるべきです。私も、友達と話したくて並んで走ったり、近づきすぎてぶつかりそうになったりすることがありました。でも、このような危険性について考えるようになってから、自転車のルールを意識することができるようになったと思います。

また、「自転車は右側を走行してはいけない」とそうわかっていても、忘れてしまうことがよくありました。しかし、ある日を境に必ず左側を走るようになりました。それは、友達と公園に遊びに行こうとしていたときのことです。私は車道の右側を走っていました。すると、前から車が来て、右のランプをチカチカとさせていました。私は、その車が右側のコンビニへ行くのだと思い、止まって待っていました。しかし、その人が曲がりたかったのは、私のすぐ後ろの道でした。その車もずっと止まったままだったので、私はしぶしぶ左側に移動しました。すると、その車に乗っていた人は、窓を開けた途端、私をにらみつけ、「左側通れや、バカ！」と大声で怒鳴りました。私は初め、「バカ」と言われたので、少し腹が立ちました。しかし、後で考えてみると、私の方が悪かったことに気が付きました。

私が右側を走っていたせいで、車の通行の妨げになり、迷惑をかけてしまっていたのです。また、右側通行では建物などお互いが見えづらくなるため、出会い頭に衝突する可能性も高くなり、危険だと感じました。今回、その人に強く言われたお陰で、私は左側を通るということを忘れることもなくなり、注意してくれた人に感謝の気持ちをもつようになりました。もし、あのとき厳し

く注意されていなかったら、同じことを繰り返し、いつか事故にあつていたかもしれません。最悪の場合、命を落とすこともあり得るのです。そうになると、自分のルール違反によって招いた事故により、相手にも重い責任を負わせてしまうことになります。

また、もし衝突した相手が歩行者の場合、私が加害者になり、相手に大怪我を負わせていたかもしれません。交通ルールを守らないことがどれほどのリスクを伴うのかわかった今は、その人が怒る気持ちも理解できるようになりました。この体験を胸にこれから自転車のルールを忘れず、必ず守るようにしたいと思います。そして、自分もルールを無視した乗り方をしている人に注意できるようにしたいと思います。

最近、学校でも、自転車に乗っていて怪我をしたという話をよく耳にします。十分に注意していたつもりでも、事故はいつ起こるかわかりません。自転車の事故を減らすためには、一列で走るとか、左側通行を守るなどのだけでもわかっている交通ルールを一人一人が意識して、きちんと守ることが大切だと思います。そのためにも、まずは自分が自転車に乗るときには必ず交通ルールを守ると心に言い聞かせて、安全に乗り、命を大切にしていきたいと思います。

免許返納の大切さ

松山市立拓南中学校

一年 中 美月

スーパーの駐車場を逆走している車。運転手を見ると高齢の女性。駐車場なので、スピードを出していないから、事故にはなりません。対向する車もいません。もし、これが一般の道路だったらと思うと怖くなっています。

近年、交通事故の件数が減ってきています。数としては高齢者の事故も減っているものの、全体の割合では、まだまだ高齢者の事故が多いのが現状です。テレビでも「高齢者ドライバーの事故」のニュースを見ます。そのニュースの後には、必ずと言っていいくらい、免許返納の話題があがっています。

私の祖父は、隣の香川県に住んでいます。私のことをかわいがってくれていて、今でも毎月、季節のフルーツを送ってくれます。口数はあまり多くない祖父ですが、話す言葉から私を愛してくれていることを感じています。私が小学校四年生のときまでは、運動会は必ず、見に来てくれていました。自分の運転する車で、助手席に祖母を乗せて元気に日帰りをしていました。でも、五年生になってからは、運動会に来てくれなくなりました。不思議に思った私は、母に、

「なんで、じいちゃんとはあちゃん、今年は運動会、見に来てくれるの？」
と聞きました。

「暗くなると、前が見えにくくなって、運転するのが危なくなるから、無理なんだって。」

と、母が寂しそうに答えました。私は、それを聞いて、残念ではありましたが、納得しました。祖父母が帰っているときに、事故を起こしたり、事故に巻き込まれたりすると怖いからです。私の四年生の時の運動会を最後に、祖父母は、一度も愛媛県には来ていません。今では、私たち家族が祖父母の家に行くことが増えました。

しかし、免許の返納については、まだ考え中らしいです。免許を返納してしまうと、車を運転することができなくなります。祖父の家は、のどかなところにあり、周りが田んぼに囲まれています。電車やバスなどの公共の乗り物は、近くにありません。だから、車の運転ができなくなると、病院や買い物に行くのにも困ります。

たとえば、電車やバスが便利な都会であっても、高齢者が、重い買い物を抱えて電車の駅を移動したり、慣れない乗り換えをしたりするのは、負担になるだろうと思います。だから、免許を返納してしまうと、一人でどこにも行けなくなる人もいるでしょう。そう考えると、免許を返納することで、生活が不便になると考える高齢者も多いと思います。でも、私は、生活の不便さよりも、人の命、祖父の命が大切なのです。

年を取ると、視力や聴力が衰えたり、認知機能も低下したりします。その体で、車の運転をするとしたらどうでしょう。もし、事故を起こしてしまったら、自分の命を失うかもしれません。何人も大切な命を失うかもしれません。それも、罪もない人の命

を一瞬で。命が失われることを考えると、体やその機能の衰えを感じ始めたら、免許の返納を考えてほしいと思います。

今回、高齢者と免許返納について考えていく中で、国や県、市町村が、高齢者の方が移動しやすいような環境作りをもっと進める必要があると思うようになりました。例えば、バスの便を増やしたり、タクシートの割り引きをしたりするのもいいかもしれません。また、駅のバリアフリーをもっと進めるのもいいと思います。また、道路を歩く機会も多くなるかもしれません。そうすると歩道の整備や信号機の設置も必要になるでしょう。

私の通学路には、県道（旧国道十一号線）があります。朝は、通勤や通学のための車や自転車が出っぴりなしに通っています。そこを渡って通学しています。横断歩道はありますが、信号機はありません。保護者の方が当番で見守り活動を行ってくれています。もし、ここを高齢者の方が通るようなことがあると思うと、心配です。当番の保護者の方が、横断歩道を通る私たちのために一緒に渡ってくれている時、手前の車は止まっても、対向車線の車はスピードを落とさずに走っていくことがあるからです。

そう考えると、高齢者の免許返納と社会の環境の整備は同時に行わなければならないのだと思います。

次に私が祖父と会うのは、冬休みになると思います。大事な祖父の生活と命を守るために、どうすればよいか、祖父と家族とともに、免許返納について話し合っていきたいと思っています。

安全な乗り方

愛媛大学教育学部附属中学校

一年 平岡 ころも

交通事故は何時何処にでも起きると言う位発生しています。心に残っている事故は、高齢者の男性がブレーキとアクセルの踏み違いで自転車に乗って横断歩道を通っていた母親と幼い子供にぶつかり、二人が亡くなった事故です。父親は泣きながら、「重い刑を科して下さい。」と言っていました。いくら処罰されても亡くなった命はもどりません。運転する時は集中してハンドルをもつてほしいです。今、高齢者の免許返納についてニュースでよく聞きます。

私の祖母は七十二歳ですが、いつも車で行動をしています。友達と会ったり、運動のためジムへ通ったり忙しく走っています。今は車が祖母の足の様です。

母はいつも祖母に「気を付けてね。」と言っています。しかし祖母は四十年以上ゴールド免許だったけれども、最近一時停止の場所で止まらず、「違反切符を切られた。」と言っていました。祖母は、「警察の人に感謝するよ。」と言っていたので、なぜと聞いたなら、人にぶつかったり、交通事故になる前に注意をいただいたので、あつと我に返り自分は年をとっているのだと、反省したそうです。今は、注意深く運転する様に心がけているそうです。「あと何年車の運転が出来るか。」と言っているとかわいそうと思うけれども、祖母のためにも、その時が来たら、私は「もう乗らない方がよいよ。」

と言ってあげようと思います。しかし、免許を返納した後、生活に支障がでてくるのが問題になってくると思います。

交通手段が発達している都市部では、買い物や病院へ行くことが出来るけれども、高齢化が進んでいる場所では思う様に動くことがあると思います。生活に必要な食品や日用品を買いに行くことも不可能です。地域によっては、乗り合いバスや介護送迎バスなどがありますが、それぞれの地域で考えて高齢者の人達が安心して暮らせるようにすることが大切です。また、免許を返納すると運転経歴証明書を受けることができます。それを提示すると、バス、鉄道が半額になったり、タクシー料金が十パーセント割引になるそうです。高齢者になって免許を返納しても安心して暮らせるように、みんなで協力して住みやすい環境を作ることが望みます。

私はこの春から中学校へ自転車で通学をするようになりました。自転車で走ると風を感じ、とても気持ちが良いスピードが出てしまします。せまい道を走るときや後から自動車が近づいて来るときにあせってしまうこともしばしばあります。そのときは、相手の気持ちを考えて早めに左側に寄って止めて待つ余裕を持ちたいと思います。学校までが遠く、交通量も多いため、注意しなければいけません。車の動きを良く見て、自分自身も飛び出さないように気を付けていきたいです。

いつも学校に行くとき、母が車に気を付けてと言ってくれますが、「はい。」と返事をしながらも、すっかり頭の中に入っていないから、ついついスピードを出し過ぎてしまったり、あせって

しまったりするのだと反省しました。

最近では、けい帯電話を持ちながらの車の運転やあおり運転など色々な危険行為をする人も増えています。そのような行為をすることで多くの人を不快な気持ちにさせたり、色々な人に迷惑をかけたりにしてしまいます。だから、他の人の気持ちを考えて走行したり、自分の気持ちより安全運転を優先させることが大切だと思います。また、友達や知人がそのような行為をしていた場合は、やってはいけないことだとしっかり注意することが大切だと考えます。

私は交通ルールを守っていても事故にあうことがあるかもしれないと考えて行動すべきだと考えます。また、どんなときでもお互い相手のことを思いやることが大切で、自分から進んで行動しようと思います。そして自転車に乗るときは時間に余裕を持って出たり、一列で走ることを大切にしていきたいと思っています。狭い道では、ゆっくりと注意して乗ることが大切です。事故を起こせば、自分だけでなく相手の人にもつらい思いをしなくてはならないので交通事故にならないように気を引き締めて、自転車通学をしたいと思っています。

自転車、バイク、自動車全てのドライバーは交通ルールを守ることが大切です。そして、自分の運転で他の人の人生を台なしにしてしまう危険があります。それを認識して注意をおこたらず責任を持って行動してほしいです。全ての人がルールを守るということが事故を防ぐことにつながると 생각합니다。

免許のあり方

松山市立鴨川中学校

一年 好川 梨子

また、高齢者による悲しい事故が起こってしまつた。七月七日の激しい雨の降る日だった。今日は、七夕。のんびり夕飯を食べていた、私のはしが止まる。テレビから、園児が願いを込めて書いた短冊が風雨にさらされている映像が流れた。高齢者がブレーキとアクセルを間違えて幼稚園へ、突っ込んだらしい。雨が園内に吹き込んでいた。

私は、車の運転をしたことがないからもちろん分からないけれど、ブレーキとアクセルを間違えることなんてあるのだろうか。何十年もきつと車に乗ってきていたはずだ。それなのに、間違えるなんて信じられなかった。だから、祖父に聞いてみた。すると、「歳をとると、そういうこともあるもんだよ。」と、言っていた。私の祖父は、すでに免許を返納している。だからあまり深くは、考えなかった。「やっぱり免許がないと不便だ。返すんじゃないかった。」と言って、後悔していた。よかった。私の祖父は免許を返納していて。事故を起こしてからでは遅い。車の操作一つで、人の命が奪われたり、奪ったりしてしまうのは、あまりにも悲しすぎる。でも、そのニュースを見ても祖父は免許を返すんじゃないかと後悔する。車という存在が普段の生活に深く入り込み、どれだけ便利な生活にしてくれているのだろう。それに気づく人は、返納した人だけなのかもしれない。祖父の気持ちが分かるようになる

ときが、やがてくるのだろうか。今の私には、全く考えられなかった。

高齢者がアクセルとブレーキを間違えても、安心な車。そんな車の開発が昨今、行われているようだけど、全ての事故がなくなるのは、不可能なのか。まだ、時代が追い付いていないのか。やはり、高齢者は免許を返納しなければならないと定めるべきなのか。難しい問題だ。もし、持病があつて通院を余儀なくされた高齢者がいたとしたらどうだろう。車がないと命に関わる。でも、事故を起こす可能性もある。両方とすることはできないのだろうか。

私はそこで提案したいことがある。それは、条件付きの運転免許を与えることである。もちろん、七十歳以上の全ての高齢者に、高齢者講習を受けていただき、その上で、運転できる範囲を設ける。生活に欠かせない、病院、最寄りのスーパーマーケットに限り、運転を許可する免許を設けるのだ。実際、海外ではそういった条件付き運転免許証を認めている国があるというのを聞いたことがある。日本もそうしたらいいと思う。他にも公共交通機関を全て無料にするといいと思う。そうすれば、免許を返納してもよいと考える人も増えるのではないかと思う。しかしこれは、都市部で交通機関の便利などところでしか無理なのかもしれない。だからできれば、タクシーの利用も月の金額を決めて利用できるようなってほしい。その金額を国が補助し、運営できれば、悲しい事故はより少なくなっていくだろう。

しかし、これで悲しい事故が全て防げるとは限らない。中には、免許があるからと認知能力や身体的能力が低下していても運転す

る人は必ずいる。社会全体でこの問題を考え、意見を出し合うことが大切なのではないかと思う。そして、一番大切なことは、社会全体で、真剣にこの問題と向き合い、お年寄りに優しい社会をつくっていくことこそが大切だと思う。そういう社会になれば、自然と悲しい事故はなくなり、幸せな生活を送ることができるだろう。

しかし、目まぐるしく変わる社会情勢のせいで、最近、心にゆとりのない人が私の周りに、地域に、社会全体に広がっているように思う。「あおり運転」も、その一つだと思う。危険なだけに、なぜそんなことをするのか、してしまうのか、私には全く理解できない。自分がされていやなことを平気で人にする。いけないことだと、子どもでも分かることなのに。自分がされていやなことをするのは、きっと心が悲しい人。気持ちにゆとりのある行動こそが、交通事故という悲しい事故を防ぐ一番の方法だと私は思う。そしていつの日か、そんな悲しい事故がない世界になってほしい。私は、妹が家にかざっていた笹かざりに、「悲しい事故がなくなりますように」と、願いをこめた。

気を付けよう 自転車！

鬼北町立広見中学校

一年 河添 結

私は、学校に自転車で行っています。交通安全に気を付けて、登校しています。歩道を渡るときは、自転車を降りて、押して渡っています。

なぜ、こんなに気を付けているかというと、失敗した経験があるからです。

私は、中学校の入学式、自転車登校の初日に、姉に連れられて登校していました。私たちの学校では、先輩が新入生を学校まで案内してくれます。しかし、その途中、よそ見をしていた私は、姉の自転車のタイヤに当たって、道路の真ん中でこけてしまいました。そのとき、後ろから車が来ました。私は「危ない」と思って、とっさによけようとしたのですが、体が痛くて動けませんでした。直前で車は止まり、女の人が降りてきて、「大丈夫」と声をかけてもらいました。

もし、私のことが、車から見えていなかったら、私は死んでいただかかもしれません。私がきちんと前を見て、姉の自転車に当たらないようにしていたら、こんなことにはならなかったのにと後悔しました。

その後はこのようなことがないようにと、気を付けていたのですが、また、やってしまいました。

コロナの影響で、分散登校になったときです。姉と、午前、午

後に分かれてしまったので、一人で学校から帰っていました。通路には、踏切があります。そこを渡っているときに、線路の間に自転車のタイヤが挟まってしまいました。踏切を斜めに渡り、線路と全く同じ方向で歩いてしまったからでした。その時も車 came たので、急いで抜け出しました。

踏切の自転車事故は結構多いそうです。兵庫県では、七十歳の女性が、踏切のくぼみにはまってしまって動けず、電車と衝突したという事故がありました。私と全く同じ状況だったので、とてもおそろしくなりました。

振り返ってみると、私は、結構危ないことばかりしてしまっているようです。

私は、よく近所の自動販売機に飲み物を買に行っています。そこに行くまでのところに、急な下り坂があります。そこは、日陰で、風通しもよく、気持ちがいいので、ブレーキをかけずに走っていました。そこには、カーブもあります。いつもは何事もなく通り過ぎるのですが、ある時、そこでこけてしまいました。スピードも結構出っていたので、こけると、とても痛かったです。

それからは私は、下り坂では、しっかりブレーキをかけるようにしています。ブレーキをかけていても、やはりカーブのところではたまにこけることがあるので、今でもしっかりと気を付けています。

何事でもそうですが、慣れると、気がゆるんでいきます。そうすると、事故を起こすかもしれません。もしかしたら、重大事故につながってしまうこともあります。今も、そして来年も再来年も、

卒業してからも、交通事故にあわないようにしたいです。そして、交通事故を起こさないように気を付けたいです。

自転車は、被害者だけではなく、加害者にもなる危険なものです。ある事故では、小学生の子どもが、歩行者と衝突してしまい、被害者の方が植物状態になってしまうことがあります。もし、自分が加害者になってしまったとき、私は不安になり、相手の方に申し訳ない気持ちでいっぱいになっていると思います。しかも、その事故の損害賠償訴訟では母親に、約九五〇〇万円という高額な賠償金が請求されたそうです。自分の不注意のせいで、親にまで迷惑をかけてしまうのは、とても怖いと思いました。

私は、こんなことになってしまったためのために、自転車損害賠償責任保険に入っています。愛媛県では、こういった保険への加入が、今年から義務化されました。私も一応入っていますが、事故を起こさないのが一番なので、これからも事故を起こさないようにしたいです。

自転車は、子供から大人まで、誰でも乗れる乗り物で、とても役に立つ便利なものです。でも、だからこそ、いつ、誰が、どうなるかは分かりません。交通安全を心掛け、自転車を危険な乗り物にするのではなく、便利で、楽しい乗り物としてもらえるよう、気を付けて過ごしていきたいです。

高齢者による交通事故を防ぐには

西条市立西条北中学校

二年 鳥取 実結

近頃、車がお店や歩道に突っ込む事故をニュースでよく見かける。運転しているのは、特に高齢者の場合が多い。原因としては、アクセルとブレーキの踏み間違いや、前進(D)と後退(R)のギアの入れ間違いがほとんどだそう。私の家の近くに高齢のおじいさんとおばあさんが二人で暮らしており、数年前に家のブロック塀を修理していた。それほど古いブロック塀ではないのに、何故修理しているのか疑問に思い、母に聞いてみると、おばあさんが車を運転し、駐車場から出ようとしたときに、ギアを入れ間違えてブロック塀に突っ込んでしまったそう。このように、高齢者による車の事故は、ニュースだけの世界ではなく、私の身の回りでも起こっている。

私の祖父と祖母は、現在、二人で暮らしている。祖母は車の免許を持っていないが、祖父は車を運転している。祖父は、これまで幸いなことに交通事故を起こしたことはないが、今年で八十一歳と高齢なので、家族はみんな心配している。昨年、祖父が乗っていた車の車検の期限が切れるので、祖父は更新するつもりだったが、父はそれに反対し、祖父を説得し、新しい車を買うことにした。その理由は、祖父が以前から乗っていた車は、前方に車や人などの障害物があるときに、警報やブレーキ操作を行ってくれる、自動ブレーキシステムが搭載されていなかったからだ。自動

ブレーキ搭載車だから百パーセント事故を防げるという訳ではないが、事故が起こってしまった場合には、その衝撃を軽減してくれるそう。そのときに私は、高齢者が運転免許を返納する内容のテレビ番組を思い出した。自動ブレーキシステムは、確かに今よりは安全になるが、絶対に事故を起こさないという訳ではないので、祖父も無理して運転せず、運転免許を返納した方が良いのではと思った。その話を父と母にしてみたが、祖父の運転免許の返納は、現実的ではないということが分かった。祖父母の暮らしている家から、食品や日用品を購入する一番近いスーパーまで約二キロメートル離れている。その距離を歩いて行くのは大変だし、買い物袋を持って歩いて帰ってくるのは高齢者には大変な苦労である。また、祖母は昨年、転んで足を骨折し、隣の市の病院に入院していた。祖父は毎日、祖母の世話をするために、車を運転して病院まで通っていた。現在、祖母は退院したが、まだ定期的に病院に通院しており、祖父が車で送迎をしている。もちろん、自家用車以外に交通手段がない訳ではない。例えば、祖父母の住んでいる市には、コミュニティバスが走っている。しかし、一番近いバス停までは家から約五百メートル離れており、二〜三時間に一本しか運行していない。更に、祖母の通院している病院までは、何度かバスを乗り換えなければならない。都会では、交通手段が発達しており、車がなくても生活ができるのだろうが、田舎では車がないと生活ができなくなる。だから、高齢者は、生活のために車を運転せざるを得ないのだ。

日本の六十五歳以上の高齢者人口は、三千五百八十八万人、総

人口に占める割合は、二十八・四パーセントであり（総務省統計データ、二〇一九年九月十五日現在推計）、今後も高齢者の割合は増えていく。このような状態の中、高齢者による交通事故を抑制するためには、車を運転する高齢者が気を付ける、歩行者も車が予想外の動作をすることを前提に気を付けることは大切であるが、それだけでは難しいと思う。高齢者は、車の運転に必要な判断力や運動能力がどうしても低下してしまう。それを補うために、科学技術を活用した自動ブレーキシステムなどの導入、また、それを義務付けるための法律の整備が必要であると思う。また、高齢者が車を運転しなくても生活できるようにするためには、コミュニティバスなどの公共交通手段を今以上に充実させなければならないと思う。このように、高齢者による交通事故を抑制するためには、社会全体で考え、取り組んでいくことが大切だ。私も社会の一員として、どうすれば高齢者による不幸な交通事故を防ぐことができるかを考え、提案、実行していきたい。



「自分は大丈夫」と思わずに

西条市立河北中学校

二年 森川 花恵

最近、テレビなどで高齢者ドライバーによる事故のニュースをよく見ます。高齢になると、視覚や聴力が衰えたり、認知機能が低下したりしていくため、事故を起こしやすくなります。私は全てこのようなことが原因で高齢者ドライバーによる事故が多く起きているのだと、今までずっと思っていました。

ある日の朝のニュースで、「年齢別による自動車ドライバーで自分の運転に自信があるか」というアンケート結果が放送されていました。私はそれを見てすごく驚きました。二十代や三十代の若い世代の人よりも、六十代以上の人のほうが、自分の運転に自信があると答えた割合が圧倒的に多かったのです。私はこのアンケート結果を見て、高齢者ドライバーの事故は、認知機能が低下していくことに加え、運転技術の過信というものも関わって起こっているのではないかと思います。「自分の運転技術に自信がある」これは、運転をするうえでとても重要なことかもしれません。しかし、反対に、自信があるからこそ、「自分は大丈夫」と思っているということにも捉えることができます。私は、長年の経験が生かされ、プラス面で出ることもあれば、このようにマイナス面でも出ることもあるんだなと思います。

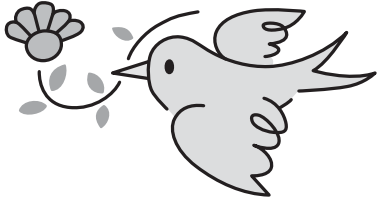
一年ほど前に私のいとこが車に乗り始めました。その時、たくさんの人が、「気を付けて運転するんよ」などと声をかけていました。

私も乗る側として考えると、たくさん運転してきた人の方が、正直、安心して乗ることができます。しかし、私はその時ふと、最近乗り始めた初心者ドライバーの方が、慎重に運転し、安全なのではないかと思いました。運転に慣れている人の方が安全に思うけれど、実は違うのかもしれないとその時改めて感じました。

この「慣れの怖さ」は、自分自身でも体感したことがあります。私は、中学生になり、毎日自転車通学をしています。一年生の春の頃は時間に余裕をもち、スピードも出し過ぎず、一時停止なども一回一回気を付けていました。私の通学路は決して車が多く通るような道ではありませんが、自分の命、他の人の命を守るためにきちんとできていました。しかし、自転車通学を毎日していると、だんだん、時間に遅れて出発してしまうようになりました。そのため、スピードを出しすぎたり、「車はいないから大丈夫」と、一時停止を適当にしました。自分の中では、いいかげんことだと分かっているけれど、「私は絶対大丈夫」と思ってしまう自分もいるのです。そんな時、曲がり角で左右の安全確認を適当にしていまい、もう少しで車とぶつかりそうになったことがありました。その時の私は、登校時刻に遅れそうで急いでいました。私はこの出来事で、もう一度「慣れの怖さ」を痛感し、それからは時間に余裕をもち、前後左右の安全確認、一時停止などをきちんとするように気を付けています。

このように、車や自転車を毎日のように運転していると、少しずつ運転に慣れていきます。この「慣れ」は、実はものすごく怖いものです。高齢者の人の中にも、この慣れによって、「自分は大丈夫」と思っ

ではないかと思えます。高齢者ドライバーによる事故以外にも、事故を起こしたり、巻き込まれたりした人は、「まさか自分が」と思っただでしょう。私は、運転を長い間してきて、運転することに慣れていても、もう一度初心に戻っていくことが大切だと思います。これは、高齢者の方だけに言えることではありません。私たちの世代から高齢者の方まで、幅広い世代の人に言えることです。「自分は大丈夫」と思っている人の方が、事故に遭う確率が高くなっていくと思います。自信は、自分の命に代えられるようなものではありません。命の方が自信よりも何倍も大切です。交通事故は、いつ、どこで、誰の身に起こるか分かりません。どんな時でも、決して「自分は大丈夫」と思わずに、常に安全に運転し、自分の命を自分で守ることが大切です。私も、自分の命、他の人の命を守れるようにしていきたいです。



ながら運転の危険性

今治市立伯方中学校

二年 片山 瑠菜

最近、ニュースでながら運転や歩きスマホに関するニュースをよく見ます。また、私が自転車に乗っている時や車に乗っている時も、見かけることがあります。なので、結構身近なことだと思い、調べてみました。

ながら運転は、道路交通法第七十一条第五号の五により、禁止されており、停車しているときや急病人の救護や緊急事態をのぞいて、運転中にスマホの通話使用やスマホやカーナビの画像を注視してはいけないという決まりです。そんなのあたりまえでしょと思うかもしれませんが、しかし、電話がかかってきたから、かけている音楽を変更するためなど、案外触っている人はいると思います。もちろん罰則もあり、昨年十二月には強化されました。携帯電話等を保持していた場合、改正前は五万円以下の罰金から改正後は六ヶ月以下の懲役または十万円以下の罰金となりました。また、携帯電話等の使用により、交通の危険を生じさせた場合、改正前は三ヶ月以下の懲役または五万円以下の罰金から改正後は一年以下の懲役または三十万円以下の罰金となりました。厳罰化するということは、やはり増えていて、社会問題になっているのかなと思いました。

ながら運転に関する事故は平成三十年の一年間で二千七百九十件でうち、死亡事故は四十二件だそうです。十年前と比べて約2

倍にもなっています。そして運転中のスマホなどの使用は使用しない場合に比べて死亡事故になる危険性が約二・一倍となるそうです。

実際に起きた事故は、「スマホを操作していた車にはねられた人が水路に転落し、死亡した。」「電話をしていた車が赤信号のところでつつこみ、横断歩道を渡っていた人とぶつかった」など、歩行者を巻きこんだ事故も増えているそうです。運転する側の不注意により、何も悪くない歩行者を命の危険に仕舞ってしまうこともあるし、もちろん車の方が強いので、巻き込まれた歩行者の方が危険です。なので、ながら運転は絶対にだめだと思いました。

そんなながらスマホを予防する方法は、主に二つありました。一つ目は、運転中のスマホは、ドライブモードに設定したり、電源を切ったりなど、呼出音が鳴らないようにすることです。二つ目は、二人以上で乗っている時はスマホを預けておいたり、カーナビを操作してもらうことです。私は、二つ目の予防方法が良いなと思いました。電源を切っておくと、緊急の時に不便だけど、預けておくと確認してもらえし、どうしてもその時は、停止することが大切だなと思いました。また、最近では、ながら運転を防止するサービス等も開発されているらしいので、役立てるといえると思います。

この作文を書くとき、ながら運転について調べていると、「あなたは三秒間目を閉じて運転できますか」という記事を見ました。実際に運転している親や祖父に聞くと、ムリだと言いました。その記事には、ながらスマホをすることは、目を閉じて運転するの

と同じことと書いてありました。この言葉を見て、スマホを見ることは本当に危険だと思いました。私は車の運転はできませんが、自転車は毎日乗るし、周りにも運転する人はたくさんいます。なので、ながらスマホの危険性について、もっとたくさんの人に知ってもらいたいと思いました。



「そう祖父の決断と共に」

松山市立旭中学校

二年 秩父 心悠

「ぶどうや栗、かき、お米などたくさん食べさせてあげるから、山仕事がんばるぞ」と言うそう祖父。私には、香川県三豊市高瀬町というところに、山仕事、畑仕事に命をかけている九十二歳のそう祖父がいます。自給自足の生活で、朝から夕方までほぼ毎日太陽の下で体を動かしているの、現在まで病気で入院したことがないので。美術の先生だったということもあり、とても姿勢がきれいで、今でも絵画作成にはげんでおり、認知症はまったくありません。

そんなそう祖父ですが、去年の夏休みに免許を返納しました。きっかけとなったのは、私が家へ遊びに行き、そう祖父の運転で絵画資料集めのために近くのダムへと出掛けた時のことでした。その時、横に乗っていた私は、そう祖父の運転に違和感を味わったのです。

まず一つ目は、「曲がる際にウィンカーを出し忘れること」です。田舎とあって、あまり車通りはなく、普段から使っている道とあって、自分中心で運転しているところを発見しました。

二つ目は、急発進や急ブレーキ、急ハンドルなど、運転が少し荒くなったことです。集中力や反応の衰えを感じました。特に交差点で、歩行者や自転車が急に現れて驚くことが多くなりました。四つ角を曲がる時、ブレーキを踏むとき、常に意識して周囲に

注意を払うことが大切だと思いました。

三つ目は、気がつくそう祖父が先頭を走っていて、後ろに車列が連なっていることが何回もありました。道幅が狭く、後続車は抜くに抜けず、イライラしていたことでしょう。私は言葉をかけてあせらせてしまってもいけないと思い、そこは見守っていました。みなさんも、こういった光景を一度は目にすることがあると思います。

近年、高齢ドライバーの事故は増えています。「お年寄りの運転は危ない。」の一言ではすまされません。事故を起こす要因として、高齢者の身体的機能と認知的機能の低下があります。動くもの、たくさん情報の判断・処理する能力の低下、とっさの時ハンドルやブレーキ操作に遅れや誤りが起こることです。日々の生活の中で当たり前に毎日運転していたから、このような自覚をすることはなかなか難しいです。家族がなにも対策をとらず、そう祖父の運転もすっかり見ずに、「運転が危ないから今すぐやめて」と言っではいけないのです。

私は、「家族みんなもきちんと対応を考えなければいけない。」と考え、自ら父、母、祖父、祖母、そう祖父、みんなに集まってもらって、運転の必要性やインターネットで見つけた運転時の早期発見チェックリスト一覧を参考にして運転技術チェックをつけてみました。早期発見チェックリスト三十項で、チェックに当てはまるものがあつたらつけていき、そう祖父の運転の様子をドライブレコーダーで記録して、家族で一緒に再生して見てみました。なんと驚きの結果は、二十一個でした。そう祖父も、運転歴が長いこ

とから、自分の運転技術を過信してしまっていたと話してくれました。加齢にともなう体の変化を止めることはできません。「免許証の更新ができたから大丈夫」「認知機能検査を通ったから大丈夫」と思うのではダメなのです。そう祖父は、安全な運転が出来ていないと確信し、自他の生命、体を守るために、勇気を持って「免許証の返納」という答えを出しました。

この判断に私は少し心が痛みました。私はそう祖父の気持ちに配慮していたのでしょうか。この結論は、そう祖父の生きがいの一部をうばってしまうことになったのではないのでしょうか。と自問しました。でも、そう祖父を含めてみんなが口をそろえて「ありがとう。」と言ってくれたので、その一言にホッとした私です。遊びに行った夏休み最後の八月末に、そう祖父は免許返納しました。写真立てに「運転経歴証明書」を飾りました。ものすごく輝いています。それを見て、そう祖父も明るく晴れびれた顔でした。

山に住んでいるため、最初は車なしでの生活に戸惑っていました。山に家族と一緒に住んでいるので、生活していく上で支障はないそうです。他にも、そう祖父がいる香川県三豊市では、コミュニティバスの回数券を発行してくれたり、お店の移動販売車など地区の方がサポートしてくれたり、生活支援サービスが充実してきています。もともとと高齢者の外出支援サポートの輪が広がって、住みやすい生活になってほしいです。

免許を返納した現在は、一輪車を押して畑仕事に向かうそう祖父。私達はおいしい山の幸を食べて過ごすことができ幸せです。

もう一步先の慎重さを

松山市立久米中学校

二年 中塚 晴日

それは去年の十一月、穏やかに晴れた日曜日の事だった。私は母の運転で、フィギュアスケートの練習に向かう途中だった。私は何の気なしに窓の外を眺めていた時、対向車線向こう側の脇道から、一台の車が飛び出してきた。「ぶつかる。死ぬ。」と、心の中で叫んだが、声は出ず体も動かなかった。「危ないっ。」という母の声が聞こえ、ハンドルが大きく切られた。ドンという大きな衝撃を受け、車は止まった。私が乗っていた後部座席は大きくへこんだが、幸い私にけがはなく、母も事故の相手も無事だった。

飛び出してきた車を運転していたのは、七〇代の高齢男性だった。その後の事故処理に居合わせた私は、とても衝撃的な話を聞くことになった。その男性は、事故状況の説明の中で、私たちの車は「全く見えていなかった。」と述べたのだ。しかし、その日は快晴で視界もよく、事故現場は見晴らしがよかった。また、通常脇道から大通りに出るときは、安全のための左右の確認をする。車が見えないことはないはずだ。私は、男性の話が全く信じられなかった。

納得のいかなかった私は、後日、高齢者の交通事故について調べてみた。すると、いくつか分かったことがあった。私は、今まで高齢者の事故は、危険そのものは見えているが、俊敏な反応ができず、回避できないために起こるものだと思っていた。

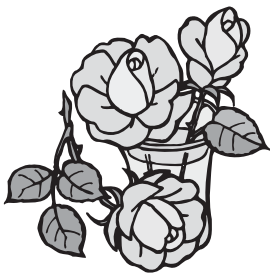
しかし、「高齢ドライバーによる交通事故発生要因（二〇一九年）」のデータによると、実際の事故原因は、「発見の遅れ」が約八割も占めていた。また、他にも、動体視力の低下、判断の遅れ、運転技術の過信といった原因も挙げられていた。またあわせて、高齢者の視界についても調べてみた。すると、私たちが色付きゴーグルを着しているのと同じで、かなり見えにくい状態だとわかった。このようなことから、私は、事故相手の「見えなかった」という言葉をようやく理解することができた。そして、今回のような事故は、いつ起こるかわからないものだと思つた。これが、危険運転なのだ。

では、危険運転は、高齢者だけの問題なのだろうか。実際、朝の通学時間に走っている車は、昼間と比べ、かなりスピードが出ている。また、歩行者が横断歩道を渡ろうとしても、止まってくれる車は少ない。急いでいるため、余裕がないのだろう。また、全年齢交通事故発生要因を見ると、「安全不確認」と「わき見運転」が、全体の約五割を占めていることがわかった。歩行者や自転車などは、自分が思っている以上に相手から見えていないのだ。人は誰でも、自分の視線が向いている以外にあるものを認知しにくい。このように考えてみると、高齢者だけでなく、すべての人に危険運転をする可能性があるのだ。

社会では、高齢者については、免許返納を勧めて事故を防止しようという声が高まっている。しかし、地方においては特に公共交通機関が少ないため、返納が進んでいない。さらにコロナ問題により、移動手段として、自家用車を選択することが増えるだろう。

このような現状のなかで、事故防止のために私たちには何ができるのだろうか。まず、相手から自分は見えにくいと意識し、自分が道路で優先される立場だったとしても、油断せずに注意する必要がある。「相手が止まってくれるだろう、譲ってくれるだろう」と考えず、慎重に行動する必要がある。また相手に、自分を認知してもらいやすい積極的な工夫も必要だ。具体的には、携帯ライトや反射材の活用、白い服の着用などだ。私は、レジ袋を畳んで携帯し、夜道でライトを持っていないとき、広げて持ち反射材の代わりになっている。

もし、あの事故のとき、私が歩行者だったら、間違いなく命がなかったと思う。そのような事故で命を失うのは悔しい。両親にも、一生消えない悲しみを負わせてしまう。人は誰でもだれかの大切な存在なのだ。みんながあと一步、もう一步先の慎重さを身に付けることで、その大切な人を守ることができる。事故のない、安心できる社会を作ることができるのだ。



ポカリ・ホットの増える未来へ

四国中央市立土居中学校

三年 高橋 美咲

横断歩道を渡っていると、平気で信号無視をする車がいて「ヒヤリ」とした。

よそ見や不注意で、車や自転車、人とぶつかりそうになって「ハッ」とした。

こんな経験をしたことがある人は多いのではないだろうか。

重大な事故や災害に直結してもおかしくない、一歩手前の状態を表すのに、「ヒヤリ・ハット」という言葉がある。あまり聞きなれない言葉のように感じるが、私たちの身近で、特に交通面には、多くの「ヒヤリ・ハット」が潜んでいる。

私自身も、何度か体験したことがある。

ボタン式の信号で、青になったのを確認して渡っていると、目の前をものすごいスピードの車が通りすぎた。「危ない!」と思わず声が出た。運転手はスマートフォンを片手に運転していて、信号が赤だということにも気付いていない様子だった。あと少し気付くのが遅れていたら、すぐにブレーキをかけられなかったら、私はきつとぶつかっていた。そう思うとヒヤリとして、頭が真っ白になった。もう二度としたくない体験だ。

他にも、部活が終わり、友達と下校している時。疲れのせいかボーっとしていた。信号のない交差点を渡ろうとしたとき、「止まって!」と後ろから声が聞こえ、反射的にブレーキをかけた。カー

ブミラーをよく見ると、奥から車が来ているのが見えて「ハッ」とした。

「ヒヤリ・ハット」の原因は、自分、もしくは別の誰かのルール違反や気のゆるみだ。自分がルールを守っていたとしても、他の誰かが守れていないかもしれない。事故はもちろん、「ヒヤリ・ハット」をおこさないためには、道路を利用する全ての人がルールを守り、しっかり周りの様子に注意をはらうことが必要不可欠なのだ。

しかし、反対にこんな経験もある。

車とすれ違うとき、道をゆずったり、スピードを落としたりすると、会釈をしてくれたり、手で「ありがとう」と合図してくれたりして、心が「ポカポカ」と温かくなった。

スピードや標識のルールを守っている車や自転車を見ると、「ホッ」とした。

ルールを守る、感謝の気持ちを伝える、といった、当たり前で簡単な事だけど、実際に自分が体験すると、心が「ポカポカ」と温かくなったり、安心して「ホッ」としたりする。これを「ポカリ・ホット」と呼ぼうと思う。ほんの少しの気のゆるみが「ヒヤリ・ハット」を生み出すのと同様に、ほんの少しの気づかいや思いやりで、自分にも相手にも「ポカリ・ホット」が生まれてくる。「ポカリ・ホット」が増えれば増えるほど、「ヒヤリ・ハット」が減っていくと思う。なぜなら、ルールを守り、相手を思いやる気持ちがなければ、「ポカリ・ホット」は生まれにくいからだ。

自分が加害者、被害者にならないために、誰かを加害者、被害

者にしてしまわないために、事故につながる「ヒヤリ・ハット」は無くさなければならぬ。また、「ポカリ・ホット」な未来をつくるのは、道路を利用する人の意識次第だ。どんなに急いでいても、どんな用事があつたとしても、道路を利用する時は、一度深呼吸をして心を落ち着かせてほしい。全ては自分の明るい未来のため、誰かの明るい未来を奪わないためだ。

自分のために、誰かのために、「ポカリ・ホット」の増える未来を、まず自分からつくっていかうと思う。



経験を胸に

今治市立立花中学校

三年 西浦 りづ

私の姉はこの夏、交通事故に遭いました。学校からの帰り道、出会い頭にこちらへと曲がつてきた一台の車と接触してしまったのです。自転車はダメになりましたが、幸い姉は手と足のすり傷ですみました。連絡を受けた母はすぐに現場へかけつけました。姉が車と接触事故を起こしたと聞き、私はどうすることもできず、ドキドキしながら待っていました。二時間後ぐらいに戻ってきましたが、すぐに病院に行くために、またバタバタと出て行きました。そして病院から帰ってきた時には、時間が遅いこともあり、母も姉もすごく疲れている様子でした。それでも、姉の顔を見て、私は少し安心しました。

そして、事故のことを聞かずにはいられませんでした。遅い夕食をとりながら、大事なことから、きちんと全部話してくれました。相手の加害者の方はすごく心配してくれて、しっかりと対応を下さったそうです。そして、まさか自分が交通事故に遭うなんて想像してもみなかったので、事故の直後は一瞬何が起ったかわからず、頭が真っ白になったそうです。それと、すごくショックだと落ち込んでいました。警察官やパトカーを間近で見るのも初めてだし、いろいろと話を聞かれてとても緊張したと話してくれました。姉は、自分の自転車と相手の車を見て、頭や顔を怪我しなくて本当に良かったと一番に思ったと何回も

言っていました。

事故の当日は、手と足の怪我した部分が痛いと話していましたが、それから一日、二日と日が経つにつれ、肩まわりや腰のあたりも痛くなってきたみたいで、すごく辛そうでした。姉は事故当日、友達と二人で帰っていたので、翌日、その友達にどんな風に転んでいたのかを聞いたそうです。すると、姉が思っていた以上の転び方をしていたようで、体のあちこちが痛くなってきたというのも納得できました。やはり、一瞬の出来事で予想もしていなかったことが急に起こったので、姉自身とても動揺していたのだと思います。いつもテレビで見たり、誰かから聞いたりしていたことが、とても身近なところで起こり、本当に他人ごとではないなと思いました。事故の次の日には「自転車に乗るのがちよつと怖い。」と言っていた姉でしたが、通学路を変えることもなく今まで通りに通っています。それどころか「事故現場を通る度に、あの時のことを思い出して、気が引き締まっていから。」と言っていました。大変な経験をしたことで、姉は確実に強く、大きく成長をしたと思います。姉の体の痛みも数日で消えたようで、毎日気にかけていた母も、ほつとしたようでした。その母がよく、

「いつも側にいて守ってあげることができないから、周りをよく見て気をつけなさい。」と言っていたことを思い出しました。そして、今も毎朝、私達姉弟が学校へ行く時には、「周りをよく見てね。いつてらっしゃい。」と見送ってくれます。姉が経験したことで一層、「自分自身の身は自分で守らないといけない」と感じました。

普段の自分の通学時のことも、改めて振り返ろうと思いました。

私は登校に自転車を使っていて、時々危ないと感じる場面を何度か見たことがあります。私だっていつ事故に遭うかわかりません。私は、姉が経験した小さな危険から、今一度、交通安全を意識するきっかけをもらったと感じています。これからも自転車は私の身近にある便利な乗り物です。自転車も危険な乗り物だということを、私達が理解していかなければいけません。

交通事故を減らすために、私が考えたことは二つあります。一つは、自分自身がルールをきちんと守ることです。もう一つは、公共の道路では、相手に気を配り、譲り合い、気持ちよく利用すること。当たり前のことですが、これができれば必ず事故はなくなるはずですよ。

油断は大敵です。被害者にも加害者にもならないように、いつ自分の家族、そして自分も大きな事故に関わってしまうかもしれないので、自分は大丈夫という変な自信を持たず、将来は自動車を運転しようと思います。自分の握っているハンドルが、自分と周りの方の未来を動かすかもしれないハンドルだとしつかり認識し、注意深く運転したいです。

また、これからも作文やポスターなどで交通安全のメッセージを伝えていきたいです。事故を起こせば、自分も相手も傷つくし、心の負担にもなり悪いことばかりです。誰も辛い思いをすることがないように、交通事故がゼロの街を目指したいです。

曾祖母との約束

今治市立西中学校

三年 金子 天音

今年の十月、祖父が四十年以上続けてきた個人タクシーを譲渡し、免許返納する事が決まった。祖父は、無事故無違反歴五十三年。「事故も違反もしないのが当たり前で、一度事故を起こしてしまうと取り返しのつかない事になる。その一度が自分や周りの人達の人を変えてしまうんだ。」と祖父は言った。小学校三年生の時、祖父の仕事の記事にした事があった。お客様を乗せる事は命を預かる大変な仕事である事が分かった。そして、お客様の命を守る為に祖父が心がけていることは私の想像をはるかに超えていた。その背景には、私の曾祖母の死が深く関係している。曾祖母は、祖母と二人で横断歩道を渡っている時、八十キロを超える速度で走ってきた車に跳ねられ死亡した。当時未成年の運転手だった加害者の両親は、祖父の家の玄関先で土下座をし、泣いて詫びたという。祖父は「頭を上げて下さい。これから未来のある息子さんが、今一人で警察にいます。一日も早く自宅に戻れるようにしてあげて下さい。」と言ったそう。祖父はどんな気持ちでそう言ったのか。突然自分の母親が亡くなり、辛いのは自分のはずなのに、どうしてその少年を許すことができたのだろうか。祖父は日々ハンドルを握り、自分の瞬時の判断が大きな事故につながってしまう怖さを知っているからだとは思った。

車を運転する心構えが素晴らしい祖父を、私は心から尊敬して

いる。そして自分自身がハンドルを握るからこそ人を許すことの出来る心の広さにわたしは感動した。

母は、「車の周りには沢山のナイフがついていると思って運転しなさい。」と常に言われていたという。「義務的に停止する場所以外でも、見通しの悪い場所では停止したり、クラクションを軽く鳴らしたり最善の注意をするように。」と祖父母に厳しく言われていたそう。

目の前で曾祖母が跳ねられる姿を見ていた祖母はこう話してくれた。「三十年経った今でもまだ忘れられないのよね。事故の聞き取りで、『自分を責めないように。色々辛い事もあるだろうけど頑張って生きて欲しい。』と警察の方に言われたのよ。」辛い事を誰にも言えず心の中にしまい込んでいた祖母。そんな事は微塵も感じさせず、いつも笑顔で接してくれ、私を大切に育ててくれたのだ。

その祖母も五年前、バイクに乗っている時に九死に一生の事故を起こした。事故にあったと連絡を受け、病院に向かっている間の事を私は全く覚えていない。だが、祖母の顔を見た時、安心して涙が出てしまった事は覚えている。「生きていてくれて本当に良かった。」そう思った。本当であれば命を落としてもおかしくなかった、あの事故。今も後遺症と闘っている祖母。それでも尚、「助けて頂いた命。大切にしてくちやね。」と優しい笑顔で言うのだ。

これだけ恵まれている世界ではあるが、悲惨な交通事故は後を絶つことがない。法律も厳格なものになり、二〇一六年以降死亡している人は減少しているものの、「死亡人数を二〇年で二五〇〇人以下にする」という政府の目標を達成するには、更なる対策が必要であるようだ。

悔やんでも悔み切れない後悔がついて回る交通事故。昨今、煽り運転という危険運転も頻繁にニュースでみるようになった。思いやりが欠ける事で、悲しい事故がまた一つ増えてしまっているのだ。

曾祖母が亡くなったのが七十五歳。今、祖父が七十五歳。そして私が、当時の母と同じ年齢の十四歳という奇跡。「きつとまだ、ひいばあちゃんも生きて、孫やひ孫の成長をみたかったと思うよ。」と母は言った

事故を起こしてしまった人の悲しみ。事故にあつて命を落とした人の遺族の悲しみ。どちらもとてと辛く悲しい。出来るなら、そのような気持ちを感じる人が一人でも少ない方がいい。その為に今、私に出来る事は一体何だろうか。日頃から母に、「慌てず、時間に余裕をもつて家を出なさいね。」と耳が痛くなる程言われている。しかし、時間ギリギリに家を出発した時などは、四つ角でも自転車をこぐ速度を落とすだけで、脇から車両が出てくるかもしれないと思える余裕は全くなかったなと反省した。自分の自転車の乗り方や規則、行儀は正しかつただろうか。私には自転車はなくてはならないものである。しかしながら、ワクワクした気持ちで自転車に乗り、周りが見えなくなっていた事も今まで多々あった。友だちと話しながら、音楽を聴きながら自転車で乗る危険性をもっと考えていこう。自転車に乗る私も、規則と行儀を守りながら上手く自転車と付き合っていこう。天国からいつも見守ってくれている大好きな曾祖母にそう誓った。

「当たり前前の日常を守るために」

愛媛大学教育学部附属中学校

三年 大野 あかり

「今日は部活があるから、帰りは六時半ごろね。」「了解。氣をつけて行つてらっしゃい。」

毎朝、私は母と自宅の自転車置き場でこんな会話をしてから家を出る。

十分ほど自転車をこぐと祖父の畑のビニールハウスが見える道を通過する。祖父は、私とその道を通過する時間に、決まってビニールハウスの入口で休憩している。そして、わたしの姿を見つけると、いつも立ち上がって手を振ってくれる。祖父のビニールハウスを通過してから学校まで、四十分。途中、いつも同じ集団登校する小学生達を追い越す。また、いつも同じ、イヤホンをしてヘルメットをハンドルに引っ掛けた高校生に追い越される。追い越したり追い越されたりしながら通学する、これが私の朝の日常だ。

こんな私の自転車通学も今年で三年目。毎日同じように通学していると、様々なことを考えるし、いろんなことが分かってくる。この信号で止まると次の信号も止まるとか、この道は日陰が多いとか、この角は飛び出しでヒヤツとすることがあるとか。

中学一年生のとき、学校の部活帰りに車と接触したことがる。私は、右側しか歩道のない県道の、右側を帰っていた。細い道との交差点は民家の壁があつて見えにくい角だと分かっていた。だから、一旦止まってから交差点に入ったのに、細い道から出てきた車のタイヤ

と接触してしまった。私は転倒することも無く、相手の車も無傷のように見えたが、後から見えない怪我が出ていけないから、と相手の車の運転手が一一〇番通報してくれた。駆けつけた警察官からの連絡を受け、母も祖母と一緒に車で現場まで来てくれた。現場にみんなそろったところで、警察官が、

「角で自転車が一瞬停止をしてから交差点に進入したから、この接触事故は大事に至らずに済んだのだと思われます。」

と言ってくれた。一気に気が抜け、ホッとした。家では、祖父が真っ暗の中、外で帰りを待つてくれていた。私は、帰ったら怒られる思っていたが、全く怒られなかった。その代わり、どこか痛いところはないか、と何度も聞かれた。家族に心配かけた、と痛感した。私は、交通ルールを守ることで、視野を広くすることが、交通事故を少なく小さくするために大切だと感じている。

一つ目の交通ルールを守ることにについては、面倒だと感じることもある。でも、そのルールがなぜできたのか、何を防ぐためにできたルールなのかを理解することで、面倒に感じたとき、守らなといけない、と思えるようになった。ただルールを守るのではなく、そのルールの意味について自分なりに考えを持つておくことによつて、最終的に自分を守ることに繋がる。そして、それが習慣になり、無意識に守れるようになる。私が疲れた部活帰りに見えにくい交差点で一旦停止できたのは、いつもの行動だったからかもしれない。

二つ目の視野を広くすることについては、意識しないと難しい人がほとんどだと思う。焦っていたり、急いでいたり、別のことを考えていたりすると、視野が狭くなってしまう。自転車を運転していると、常に何に注意すべきか、何が起きる可能性があるかなどを目

で見て想像し、予測して行動する必要がある。でも、視野が狭いとそれができなくなる。しかも、自分の視野が狭くなっていることに気づいていないことが多い。

中学三年生になってから、実際に目の前で事故が発生する瞬間を見たことがある。友達と自転車で帰宅途中だった。二車線道路と一車線道路の交差点で、二車線道路からバイクが猛スピードで右折したが、その先で信号待ちをしていた車を避けようとして転倒した。バイクの運転手は、転倒したまま動かない。信号が変わる。私と友達は、自転車を脇に止めて、倒れたバイクや人がいることを他の車に知らせ、さけて通るように呼びかけた。誰かが救急車を呼んでくれ、警察も到着した。倒れていた人が警察官と話している。もう大丈夫だ。私は少し安心して、友達と別れ、再び帰路についた。

もしバイクに乗っていた人が視野を広くできていたら、信号待ちをしている車も見えただろうし、想像もついただろう。また、スピードをもっと落として右折したはずだ。

事故の瞬間を見たあとの帰り道、自転車をこぎながら、私の頭の中では家族みんなの心配そうな顔が浮かんでいた。帰りが遅くなると、何かあったのかとみんな心配して待つてくれている。だからこそ焦るな。こういうときこそ一つ一つ確実に。いつものところで止まって、確認しよう。普段よりも意識した。

私はここから、「怒られるから」ではなく「自分を守るため」に交通ルールを守ることと、焦っているとき程、視野を広くすることを大切に、自転車通学をしようと思う。

交通事故から尊い命を守るために

松山市立三津浜中学校

三年 徳丸 波音

ほんの一瞬で尊い命が失われてしまう。これが「交通事故」というものだと思います。

私の母と兄・姉は十四年前に、交通事故にあったことがあると聞きました。この事故は、信号がある横断歩道を渡っていたときのことでした。

自転車を押して渡っていた母のところに、横側から来た車が衝突してきて、母たちは車の下敷きになったそうです。母たちは打撲や擦り傷などの軽傷で済みましたが、相手の車にも小さい子どもが乗っていたと聞きましたし、当時は兄と姉も小さかったです。運が悪ければ、命を落とすことがあったと思うと、心が痛くなります。

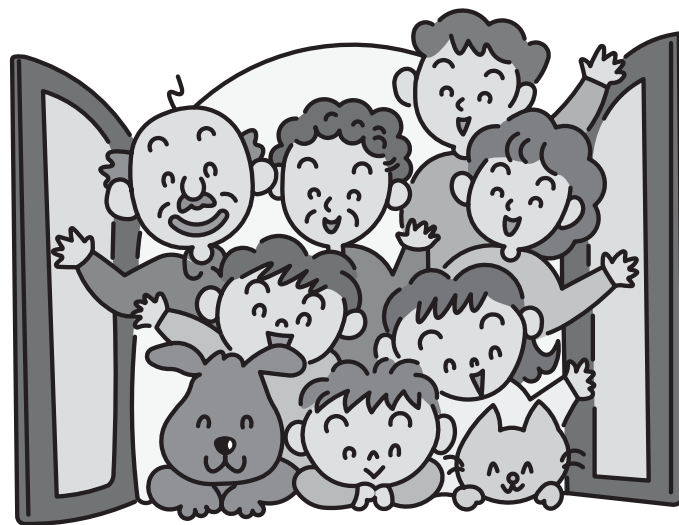
全国的に交通事故のニュースをよく聞くようになってしまった現在。なぜ、このような事故は起こり続けているのか。私なりに三つの原因を考えました。一つ目は、自動車を運転する人に考えられる原因です。基本的なスピード違反や信号無視、飲酒運転などは、昔からよく聞くことだったと思います。しかし最近では、あおり運転や高齢者運転での事故を多く聞くようになりました。あおり運転というのは、道路を走行する自動車に対し、周囲の運転者が何らかの原因や目的をもって運転中の車を煽ることにより、自動車を危険にさらす行為です。急ブレーキをかけたたり、進行妨害をする事例をよく聞くことが多いと思います。近年増加するあおり運転の対策と

して、これまで直接取りしめる規定はありませんでしたが、令和二年六月には「妨害運転罪」が創設され、あおり運転を厳しく取り締まることができるようになりました。高齢者運転による事故件数は、右肩上がりが増加してしまっているのが現状です。その中の事故原因として多いといわれているのが運転操作ミスによる衝突です。現在では、高齢者の免許返納が求められる傾向が多く見られます。今後の日本の高齢化に伴って、高齢者ドライバーを免許返納という形で減らしていくというのは、本当に正しいことといえるのでしょうか。公共交通機関の発展が不十分な地方の高齢者にとって、車は生活には欠かせない足となっていると思います。そこで、車の自動ブレーキ機能や、ペダルの踏み間違いによる誤発進防止機能などが注目されています。二つ目は、歩行者や自転車を運転する人に考えられる原因です。信号無視や前方不注意、飛び出しなどが多く挙げられると思います。また、自転車ではスピードの出しすぎやスマホを見ながら運転して事故を起こすケースも多く見られます。その中でも私はイヤホンをつけながら自転車を運転している人を見かけることが多いです。私の住む愛媛県では、イヤホンをつけて運転することとは直接的な違反には繋がりません。しかし、周囲の音が聞き取りづらかったり、クラクションの音が聞こえなかったりと、イヤホンをつけることによる障害は多く生じます。そのため、私はイヤホンに対する規定は定めたほうが良いと思います。自転車と自動車、歩行者と自動車の事故は両方とも減少傾向にあります。当事者が気を緩めず行動していく必要があると思います。三つ目は環境的な原因です。横断歩道が無い道やスピードが出やすい道、死角がある細い道などが挙げられます。私は中学二年生のとき、社会科の学習の

フィールドワークで地域の危険な箇所を探しました。私の住んでいる地域だけでも二百箇所近く、危険な場所やその対策をされている場所があり、実際に事故が起きたところもありました。全ての危険だと思われる箇所を改善することは困難かもしれないけれど、少しずつ対策を進めていく中で、沢山の人が高い意識を持ち、行動していくことが大切だと思います。

このように、私が考えた三つの原因は全て何らかの形で必ず解決方法があるものだと思います。個人や地域の人々。また、市区町村や国全体。必ずそれぞれにできることはあるし、それぞれが向き合っていないといけない問題でもあります。そのために現在行われていることは、地域での見守り活動や、市区町村による看板やポスターなどの設置、国による法の改定などです。

毎日のように、当たり前前にニュースで見かけるようになってしまった「交通事故」。当事者にならなければ良いという考えでは、甘いのは分かっているけど、どうしても他人事という考えになりやすいと思います。その度に沢山の人が考え直してほしいのが、「自分の大切な人が同じことに遭ってしまったら。」ということです。一つ一つの交通事故で誰かの大切な人が危険にさらされ、命を落としてしまっても少なくありません。なぜ、このようなことが起こってしまうのか。自分が、他の人の大切な人を傷付けてしまわないようにするには、どうすれば良いのかを良く考えてほしいです。そして、国全体で解決策を考え交通事故が少なくなる世の中になってほしいです。



自転車に「TSマーク」を貼いましょう！！

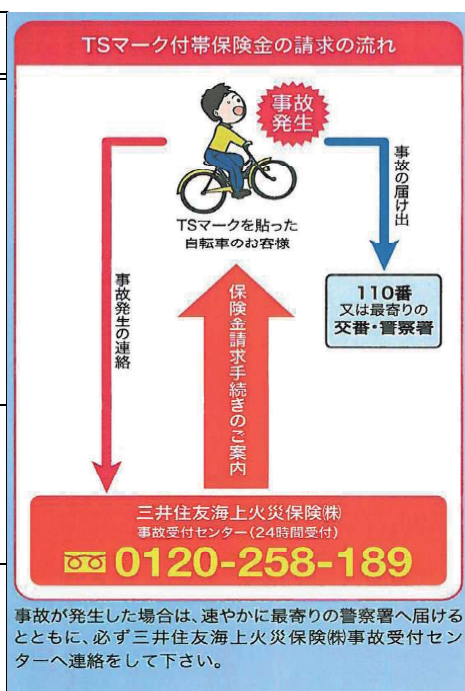
◇ TSマークには保険が付いているので安心

- 年に1回、自転車安全整備店で、点検・整備を受けると、そのしるしとして「TSマーク」が自転車に貼付されます。
- 「TSマーク」には、賠償責任保険と傷害保険の2つがセットになった1年間の付帯保険が付いているので、もしもの時に安心です。
- お近くの自転車安全整備店へご相談ください。



◇ TSマークの付帯保険の補償内容（R2.10.1 現在）

補償内容	補償額等
① 賠償責任補償 (被害者が死亡等した場合に法律上の損害賠償責任を負った時の補償)	○ 死亡・重度後遺障害 (1～7級) <u>限度額 1億円</u>
② 傷害補償 (自転車利用者が死傷等した時の補償)	○ 入院15日以上 10万円 ○ 死亡・重度後遺障害 (1～4級) 100万円
③ 被害者見舞金 (被害者が入院した時の見舞金)	○ <u>入院15日以上</u> 10万円



「思いやり1.5m」運動の実践を！



愛媛県では、「愛媛県自転車の安全な利用の促進に関する条例」の基本理念として、歩行者・自転車・自動車等がお互いを思いやり、安全・快適に道路を共有する「シェア・ザ・ロード」の精神の普及に努めており、ドライバーの皆様には、自転車を追い越すときの事故防止のため、「思いやり1.5m」運動の実践を呼びかけています。

ドライバーの皆様は、自転車の側方を通過するときは**1.5m以上の安全な間隔**を保つか、道路事情等から安全な間隔を保つことができないときは**徐行**していただきますようお願いいたします。

交通安全協会のご紹介

① 一般社団法人 愛媛県交通安全協会

松山市勝岡町1163-7 電話：089-979-2101

ホームページ：<http://www.ehime-ankyou.or.jp>

② 各地区交通安全協会一覧表

協会名	所在地	電話番号
宇 摩	四国中央市三島中央5丁目4-20	0896-23-5331
新 居 浜	新居浜市久保田町3丁目9-8	0897-32-3260
西 条	西条市新田113-1	0897-55-9911
西 条 西	西条市周布349-1	0898-64-1661
今 治	今治市旭町1丁目4-2	0898-33-3466
伯方地区	今治市伯方町木浦甲4639-1	0897-72-2911
松 山 東	松山市勝山町2丁目13-2	089-941-7810
松 山 西	松山市須賀町5-36	089-951-1725
松 山 南	松山市北土居3丁目6-17	089-958-6558
久万高原	上浮穴郡久万高原町久万542-4	0892-21-0211
伊 予	伊予市下吾川960	089-982-7081
大 洲	大洲市東大洲1686-1	0893-25-0334
内 子	喜多郡内子町内子1432	0893-43-0116
八 幡 浜	八幡浜市広瀬2丁目1-5	0894-24-4895
西 予	西予市宇和町卯之町4丁目659	0894-62-9676
宇 和 島	宇和島市並松2丁目1-30	0895-23-0027
鬼 北	北宇和郡鬼北町大字芝225-1	0895-45-0277
南 宇 和	南宇和郡愛南町御荘平城2982-2	0895-70-1311



交通安全年間スローガン最優秀作

○ 子供の部門（小・中学生からの応募）過去十五年間の内閣総理大臣賞

平成	十九年	青だけど 車はわたしを 見てるかな
同	二十年	点めつだ 一度止まって 次の青
同	二十一年	じこがない そんなまいにち うれしいな
同	二十二年	さあかくにん ライト ブレーキ ヘルメット
同	二十三年	星キラリ 自転車ピカリ 帰り道
同	二十四年	いそいでも かならずかくにん みぎひだり
同	二十五年	ヘルメット ぼくのだいじな おともだち
同	二十六年	につぽんを じまんしようよ 事故ゼロで
同	二十七年	ルールむし しん号むしは わるいむし
同	二十八年	しんごうが あおでもよくみる みぎひだり
同	二十九年	ペダルこぐ 免許はないけど ドライバー
同	三十年	自転車は 車といっしょ 左側
同	三十一年	とび出さない いったんとまって みぎひだり
令和	二年	しっかりと 止まってかくにん 横だん歩道
三年		自転車に 乗るならきみも 運転手

～ 愛媛県交通安全協会ホームページ 広告協賛事業所 (限定100事業所) ～

【四国中央市】

金生運輸(株)
大王製紙(株)
丸住製紙(株)

【新居浜市】

一宮運輸(株)
(株)大石工作所
桑原運輸(株)
住友化学(株) 愛媛工場
住友共同電力(株)
住友金属鉱山(株) 別子事業所
住友重機械工業(株) 愛媛製造所
新居浜工場

宝運送(株)
東予信用金庫
日泉化学(株)
(株)ハタダ
(株)三好鉄工所

【西条市】

(株)田窪工業所

【今治市】

(株)IJC
今治造船(株)
今治ヤンマー(株)
岡山理科大学 今治キャンパス
四国ガス(株)
四国通建(株)
四国陸運(株)
瀬戸内運輸(株)
タオル美術館
太陽石油(株) 四国事業所
波止浜興産(株)
BEMAC(株)
眞鍋造機(株)

【松山市】

あいおいニッセイ同和損害保険(株)
アカマツ(株)
アサヒビール(株) 松山支社
(株)アテックス
アトムグループ
(株)アベホンダHonda Cars 松山北
池田興業(株)四国支店
(株)井関 松山製造所
(株)伊予銀行
(株)伊予鉄グループ
(株)NTTドコモ四国支社 愛媛支店
NTT西日本
(株)愛媛銀行
(株)愛媛CATV
(一社)愛媛県警備業協会
(一社)愛媛県指定自動車教習所協会
(一社)愛媛県自動車整備振興会
愛媛県遊技業協同組合
(株)愛媛新聞社
愛媛信用金庫
愛媛総合警備保障(株)
愛媛ダイハツ販売(株)
愛媛トヨタ自動車(株)
愛媛トヨペット(株)
愛媛日産自動車(株)
オオノ開発(株)
(株)門屋組
(株)ガリレオコーポレーション
こくみん共済 coop 愛媛推進本部
JA共済連 愛媛
JAバンクえひめ
四国電力(株) 愛媛支店
四国名鉄運輸(株)
四国旅客鉄道(株)
JAF愛媛支部
(株)セキュリティエヒメ
セコム(株) 松山統轄支社
(一社)全国道路標識・標示業
四国協会 愛媛県支部
全国農業協同組合連合会
愛媛県本部

DCMダイキ(株)
(有)大豊陸送
(株)たいよう共済 愛媛支店
帝人(株) 松山事業所
トヨタ L&F 西四国(株)
(株)トヨタレンタリース西四国
日本郵便(株) 四国支社
フェイス・ソリューション・
テクノロジーズ(株)

(株)フジ
(株)フジセキュリティ
(株)フードサポート四国
ヨシケイえひめ
三浦工業(株)
(株)村上モータース
(株)四電工 愛媛支店
(株)レディ薬局

【砥部町】

医療法人 誠志会 砥部病院

【伊予市】

山陽刷子(株)
マルトモ(株)

【伊予郡松前町】

東レ(株) 愛媛工場
日章(有)

【大洲市】

(株)一宮工務店

【八幡浜市】

(株)サンリード
八水蒲鉾(株)
堀田建設(株)

【宇和島市】

宇和島自動車(株)
宇和島信用金庫
ベルグアース(株)

(令和2年12月1日現在 95事業所)



一般社団法人
愛媛県交通安全協会
Ehime Traffic Safety Association

交通安全活動を支援しています。

〒799-2661 愛媛県松山市勝岡町1163-7

TEL: 089-979-2101